筑波学院大学紀要第２集　75～84ページ　　2007年

ニュージーランド英語におけるマオリ語（Ⅱ）

横瀬　弘幸*

Aspects of the Maori Language in New Zealand English (Ⅱ)

YOKOSE Hiroyuki *

Abstract

In daily conversation in New Zealand, the Maori language comprises only five percent. In fact, however they use and speak lots of Maori language, words and phrases, everywhere. This paper examines the grammar of the phrases, the parts of speech, prepositions, the imperative with universals, negative transforms of verbal sentences and directional particles, and so forth.

抄　録

ニュージーランドにおけるマオリ語の存在は５パーセント程と言われているが、現実には使用範囲は一割近いと思われる。前回に続きどのくらいマオリ語が受け入れられ、借用されているのか文法的見地から検証してみる。

キーワード：借用語としてのマオリ語、品詞、代名詞、前置詞、前置詞

１．借用語としてのマオリ語

ニュージーランド英語に溶け込んでいる日常語は、生活、文化、動物、植物に分けられそのマオリ語は大の影響力である。よく耳にする語はkiaoraである。まずは乾杯してhaka（出陣の儀式）で歓迎をうける。大都市ならどこへ行っても民芸店があり、マオリ民族の木工、木彫りのpoi, tikiなど購入できる。これはアクセサリーであり、護身でもある。また、kumara（さつまいも）horopito（唐辛子）などもマオリ語を使って八百屋で購入できる。動物、植物にいたっては生息地のマオリ語による名前が大半を占める。土蛍で有名な鍾乳洞Waitomoや間欠泉Rotoruaもまた Otago大学の名前もマオリ語である。この借用語は、全て名詞で、英語とは関係がない。

40歳以下の層には二言語話者（bilingual）はあまりにも少ないといわれているが、一方高校や大学にマオリ語講座があり、現実に政府は力を入れている。マオリ語はsyllableに強勢がおかれている15文字からなるポリネシ

*　情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

ア系の言語である。音構成は母音５、子音10で、母音はa, i, u, e, o, 子音はh, k, m, n, p, r, t, w, ng, whである。

ngはsingerの「síngər」を表し、whはwhale（hweil）の（f）の発音である。

オーストラリア人の好むbloodyと言う形容詞はマオリ語の発音に影響されて、plurryと訛り、plurry goodすなわちbloody good（大変すばらしい）の成句で日常使用されている。

（1）Parts of speech: the base classes

マオリ語句の構造を調べて見ると、語句はフレーズの語彙の意味をもたらす基礎を置く中心的な割合又は核から成り立っている事がわかる。核の周囲はあらかじめ置かれたものか、後に置かれたかで、それらは文法的意味合いのある違った不変化詞によって満たされる。例えば、whareは家を示す。更に付け加えると、前置詞teはte whareとなりto the houseの意味を成す。またneiはhereを示し、nei whareでthis houseを示す。Maanuはafloat［海上に］を意味し、iは過去形を示し、imaanuで英語で言うwas afloatとなる。更にannoはagainの意味でimaanu anooでwas afloat againとなる。フレーズの核を満たす事のできる語はbasesと言われている。

フレーズの周囲の点において核に続く又は先行する語は不変化詞と言われている。全てのbasesは一音節は含まれているが不変化詞は音節はない。全てbasesと全ての不変化詞が生ずるわけではない。いくつかのbasesは例えばteはフレーズの中で定冠詞teをとる。他はそのようなことは決してない。Topとしてのrungaとtheyの意味を成すraatouはtoとしてのki［前置詞］として使える。To the topをin ki rungaとしてkiはrungaの前に置く。一方適切な冠詞は絶対にkiとraatouの間にin ki a raatouとして置かねばならない。WilliamのMaori辞典によると、品詞の全ては英語と同じくらいあるが、他に三つが加えられる。the difinitives（決まったもの）、local nouns（場所を示す）、neuter verbs（中性動詞）である。

また、goodの意味のpaiは彼の辞書によると、形容詞、名詞、中性動詞、他動詞として載っている。一方、森を示すraakauは名詞としてのみ載っている。

WeepのTangiは動詞、名詞として載っている。StraightやcorrectをTikaは形容詞として、また恐れている、禁止されているtapuは形容詞、名詞としてある。

Maori語の文法から見ると、沢山の品詞は少なくとも８品詞があり、一つの語が違った時によっていくつかの品詞になりえる。事実上raakauが名詞に、tangiが動詞と名詞paiが形容詞、名詞、中性動詞および他動詞などになってから品詞の数が大幅に増えた。すべての語はBases（基礎）とParticles（不変化詞）の二つに分けられている。

その不変化詞は文法的な語で、数は少ない。その他の語はBasesでそれは５階級に分けられている。そして、それはConstructionsによって決められる。結局マオリ語の構文は２つの級に分けられる。１つは動詞句と他は名詞相当語句である。

（2）Nouns

魚のika, ねずみのkioreと木のraakauなどが例を示すように名詞相当語句の核として使われるが動詞句としてではない。それらは明らかに名詞である。あえて言うと、マオリ語は名詞をbaseとしていて、動詞では決して成立しない。それは英語で言うdoorや歌の様であり、魚や木は名詞相当語句と同様準動詞の中で用いられている。

Let's learn Maoriの中で、Bruce BiggsはA noun is any word which can take a Definite article but which cannot occur as the nucleus of a verbal phrase. と述べている。

尚、Bruce Biggs氏の著書（1969）の例文を

引用する。

（3）Universals

基本の飲むinu，泣くtangi，言うkiiは受身的に用いられる。この基本はふつうである。幅の広い分布を持ち、動詞句と同様、名詞相当句の中に入れることが出来る。

Bruceはuniversalsは受身的に用いられると言う。Wellのora, correctとしてtika, afloatとしてのmaanu　は動詞句の中で使われるが、受身的には用いられない。そのような語はstativesである。stativesは英語の形容詞や分詞によりもっともよく転換されている例である。

Kia ora koutou!
Greeting!

He maha nga toa i mate i a ia i taua waa.
Many warriors were defeated by him at that time.

Ka wera te whare i te ahi.
The house was destroyed by fire.

Ka tika taau koorero.
Your talk is correct.

Stativeは受身でなくて、逐語的に用いられる基をなす。また、たいていのstativeは準動詞と名詞相当語句の間に置かれ、そこには準動詞のみに起こる小さい区別がある。この数は次のような分け方をしている。

pau,　exhausted
mute,　finished
oti,　completed
ngaro,　lost, out of sight
mahue,　abandoned
mau,　caught
riro,　taken
ea,　requited,paid
tuu,　wounded
whara,　injured
maakona, satisfied
maanu,　afloat

Kua Mutu te mahi.
The work is ended.

Kua oti te mahi.
The work is completed.

Kei whara koe!
Don't get hurt! (Be careful!)

Kaahore anoo kia ea tana mate.
His death has not been avenged yet.

（4）Locatives

いくつかのbaseは動詞句の中では起きない。また、いかなる定冠詞もとらない。不変化詞ki, i, kei, に直接先行される。このようなbaseは不変化詞と言われている。

（5）Personals

Personalsは全ての固有名詞、擬人化している物事の名詞、例えば、先祖の名前をつける礼拝堂なども其の一例である。月の名前も固有名詞である。疑問詞waiは英語ではwhoを表し、meaはso and soを表し、それぞれはpersonalsである。

2．前置詞

前置詞ko, me, ma, mo, na, no, ki, i, kei, a, oは一般的には数ある形を示す。まとめてみると次のことが言える。

（1）フレーズの最初の語とする。
（2）相互に相容れない。（同じフレーズの

中で二つが生ずることはない）

（3）文章とするフレーズとの間で特別な関係を示している。

（4）動詞句の中では生じない。

（5）同じ base のフレーズと生じ、下のような例外もある。

前置詞の語形変化例を挙げてみる。

me　接続詞的な and
a　有力な of
o　従属を示す of
ma　非現実的優位の for
mo　非現実的従属の for
no　現実的従属の of
na　現実的優位の of 又は by
ki　方向を示す to
i　過去を示す at
kei　現在の at
hei　未来の at

次に、前置詞句について考えてみる。前置詞で始まるフレーズはいかなる場合も前置詞句である。前置詞句は名詞、statives と普遍的なものを含むと最終的には前置詞と核との間に生ずる。To my home は kitooku kaainga（名詞）で表し、the chief は ko te rangatira（stative）又は（universal）で表す。万一、前置詞が核として locative を含むのであれば核と前置詞句の間には他の品詞は生じない。

On top の意味で kei runga, to the top の意味で ki runga, of the top は o runga, for the top は mo runga, the top は ko runga, to be on top は hei runga をそれぞれ表している。

ki, i, kei, hei, と人称をもつ前置詞句で始めると、核として人称の前置詞を含み、人称句は人称定冠詞 a によって先行される。

ki i kei hei	a	PERSONAL

発音の特徴についてここで考察してみる。短い音節の na, no, ma, mo は短く発音される。すなわち一つの母音以上含んでいる音節の前では長く発音される。

na and no は基本的には所有を示す of の意味を含み、belonging to の意味を持つ。

na と no の間の違いは最有力なかつ従属を示す間の相違にある。

Na wai te mea nei?
Who owns this thing?

Na Pita.
Peter does.

No te iwi katoa nga whenua.
The lands belong to the whole tribe.

Na te rangatira teenei tamaiti.
This child is the chief's.

No nga kootiro eeraa piupiu.
Those dance-skirts belong to the girls.

次に locatives のある na と no についてみると、na は by way of を意味することがわかる。Na hea mai koutou? は By way of what place did you come?

No は from の意味で、No hea koe? 又は No Aakarana ahau. で Where are you from? I am from Auckland. となる。

Na reira と no reira については、両方とも副詞としての therefore の意味をなす。通常 Na と no の区別はここでは適用しないようである。地域表現によって na reira 表現を使う傾向があるが、一方其の外の地区の話者は no reira を使う。

Ma and mo は所有を表し次のように言うことができる。

Ma Pita teenei pukapaka.
This book is for Peter.

Mo wai teeraa whare?
Who is that house for?

Mo nga manuhiri tuaarangi.
For the vistors from afar.

Mo は concerning の意味を示し、しばしば about や concerning（－に関して）の意味で使われる。例えば、waitata teeneli mo Paapaka は This is a song concerning Paapaka. また he koorero teenei mo Hine-koorangi. は This is a story about Hine-koorangi.

Ma は by way of の意味を示し、次のように言える。

Ma hea mai koutou?
What way did you come?

Ma runga o te maunga.
By way of the mountain top.

Ma hea mai to koutou ara?
By way of what route did you come?

更に、na, no and ma, mo は所有代名詞を作るため人称代名詞と結びつく。

例を挙げる。
I tiikina atu he wai mo raatou.
Water was fetched for them.

Mo koutou teenei whare.
This house is for you.

Na wai maa,nga kai nei?
Who owns this food?

Nai wai te kurii ra?
Whose dog is that?

Na raatou nga hipi nei.
These sheep belong to them.

	単数	二元的	複数
1st person incl.		na/no taaua	na/no taatou
1st person excl.	naaku,nooku	na/no maaua	na/no maatou
2nd person	naau, noou	na/no koorua	na/no koutou
3rd person	naana, moona	na/no raaua	na/no raatou

3．命令法の動詞

いかなる普遍的なものは命令を出すためには命令的な抑揚が用いられることは言うまでもない。命令法動詞を持つ普遍的表現に二つ以上母音が含まれると、その動詞 e は次のようになる。

E	tuu!	stand!
e	noho!	sit !
e	ara!	get up!
e	moe!	go to sleep!
e	oho!	wake up!
e	noho ra!	goodbye!

かりに base が二つの母音よりも多く含まれると、先行する e は用いられない。

takoto!	lie down!
tomo mail!	come down!
haere mail!	come here! (welcome!)
karanga atu!	call!
haere koe!	you go!

さて、受身の命令法が用いられるのは目的語が述べられたり、表現される場合である。

これは単に普遍的な受身の形である。命令的な抑揚であるが準動詞ではない。目的は述べられ次のように表現される。

nohoia!	sit on!
moea!	marry her!
kainga!	eat it!
kimihia te mea ngaro!	seek that which is lost!
murua oo maatou hara!	forgive us our sins!
tapahia te paraaoa!	cut the bread!
tiikina atu he wai mooku!	fetch me some water.
haria he kai ma taaua!	bring some food for us!

身体の動作として、体の部分で動作を起こすために、あたかも文章中でスターのように体のある部分を使い表現する特別な構文がある。

Haamama toou waha!
Open your mouth!

Titiro oou kanohi!
Open your eyes!

Piko toou maatenga!
Bow your head!

また、with me の意味を含む命令表現は準動詞によってとらわれている。統語的に準動詞は能動的か変動的かであって、その base は受動的な接尾辞をとらない。準動詞 me と受動的接尾辞は相容れない。

Me haere taatou!	Let's go!
Me karanga ahau!	I had better call!
Me kawe koei taku kete!	You must carry my kit!

その他の例として、

Ka hoki a Kupe ki te iwi, ka mea atu, 'Mahia taku waka kia pai!'
Kupe returned to the tribe and said, 'Prepare my canoe!'

また、否定語は準動詞の文に変える。否定的形式は否定語によるかまたは句による。それは特別な準動詞で、一対となる。過去時制

の肯定文の否定的表現は準動詞で対になったkiihaiで作られる。別の例を示すと、kaahore anooの否定句は否定の形式として準動詞kiaと対になる。そして、kuaと完了時制の中で肯定文に変える。

E koorero ana nga waahine.
The women are talking.

Kaahore nga wahine e koorero ana.
The women are not talking.

肯定文に於いて、準動詞は関係者の句によって決まるが、否定文は否定形で始められる。

E aawhinatia ana nga waahine.
The women are being helped.

Kaahore nga waahine e aawhinatia ana.
The women are not being helped.

この受身的肯定文の場合とその否定表現の場合は同じ変化となり、否定形式によりその文の導入で、準動詞の語順の倒置となる。

E tika ana te koorero.
The talk is correct.

Kaahore te koorero e tika ana.
The talk is not correct.

否定変換は倒置語順と否定形式の使用を含む。次に、kiihai…i過去時制、肯定、否定について考えてみる。

I haere maatou.
We went.

Kiihai maatou i haere.
We did not go.

I hinga te raakau.
The tree fell.

過去時制の否定形は否定形のkiihai … iによって形成される。また、通常の述部と主語の語順転倒となる。

Kua haere atu te tangata ra.
That man has gone away.

Kaahore anoo te tangata ra kia haere atu.
That man ha not gone away.

Kua mate te wahine.
The woman has died.

Kaahore anoo te wahine kia mate.
The woman has not died.

肯定の完了の文に変える否定文は準動詞kuaはkiaにとって変わる。Kaahoreは通常であるが、強制的ではなく構造においてはanooに従い語順転倒が適用される。更に、E kore … eの未来、肯定、否定について考えてみる。

E haere koe aapoopoo.
You will go tomorrow.

E kore koe e haere aapoopoo.
You will not go tomorrow.

否定形はe kore … eで従来倒置が適用される。しかし、最近のマオリ語の肯定の未来形はめったに使われない。ほとんどがkaとの誘因による時制で用いられている。kaとともに誘因による時制は形式的な否定交換はない。万一、動作の時制が過去のkiiha…iであ

ると適切な否定を作るであろうし、e kore … e と未来時制であることは適切である。Kaua … e の場合は普遍的命令法の動詞といえる。例えば、

Haere!
Go!

Kaua e haere!
Do not go!

E noho!
Sit!

普遍性のみがこの構文の中で起きる。主語が表されている所で常に倒置がある。

Kaua koutou e haina I teenaa pepa!
Don't sign that paper!

Haere taatou!
Let's go!

Kaua taatou e haere!
Let's not go!

従属節に於いて、否定命令 kaua … e は kia によって先行される。下記に例を挙げてみる。

Ka mea mai te ariki kia kaua raatou e haere ki reira.
The high chief said that they should not go to that place.

I mea mai a Kupe ki a au kia kaua e kawea keetia te ihu o te waka i te putang mai o te raa.
Kupe said to me that the bow of the canoe should not be diverted from the place where the sun rises.

次に、方向を示す不変化詞について見てみたい。話者に mai, 話者から atu, 年下のほうへの iho, 年上のほうへは ake で表し、いずれも前置詞である。これらは動詞句の中に時折見られる。大抵の動作がこれらの品詞の使用によって方向性を与える。時折、現実の動作の観念が表された動詞にふさわしくないようにも見える。Mai は話者に対して基本的には英語の hither を表す。歓迎します意味では，マオリ語は haere mai! tomo mai! は bring it here! の意味を成す。下記の例は自然の表現であり、他のはふさわしくない表現である。

I kau mai te wahine nei i nga ahiahi katoa.
This woman swam hither every morning,

E kiia mai ana, 'No hea teenei wahine?'
It is being said, 'Where does this woman come from?'

Titiro ki te maunga e tuu mai ana.
Look at the mountain standing there.

Atu は話者から方向を示す基本的な意味をもつ語である。実際に mai の動作は必ずしも含まれてはいない。

I haere mai nga maatua; ko nga tamariki i noho atu i te kaainga.
The parents came; the children remained at home.

Ka kite a Hinemoa i a Tuu-taanekai; ka titiro atu,ka titiro mai.
Hinemoa saw Tuu-taanekai; (she) looked (at him), (he) looked (at her).

更に、kawe は carry を表し、tiki は fetch を

表し、atu は mai が使われる。

Kawea atu he wai mooku.
Carry (get) some water for me,

Haere ki te kaainga ki te tiki atu i te toki.
Go home and fetch the axe.

Tiikina atu te tiikera!
Fetch the kettle!

又、atu は適切なコンテクストの中では英語の形容詞（比較級）の代わりである。

Pai atu teenei i teenaa.
This is better than that.

Nui atu te hiahia o Takarangi ki a Raumahora i te hiahia ki te riri.
Takarangi's love for Raumahora is greater thatn his love of war.

teetahi atu と teeraa atu はイデイオムの上では下記の通り other, another の意味で用いられる。

Hoomai teetahi atu!
Give me another!

Eraa waka atu.
Those other canoes.

Hoatu, whoatu は一語で使われ、方言的で、give away や set out や go の意味である。

Hoatu! Me waiho maaua i konei!
Go on! Leave us here!

ake は基本的には upwards の意味であるが必ずしもそうとも云えない。

Ka ora ake a Taawhaki i toona mate.
Taawhaki recovered from his illness.

Ka tuu au ki te koorero atu ki a koutou.
I stand up to speak to you

比較としての ake は英語の形容詞の比較で訳される。

Kua haere ia ki runga ake.
He has gone higher up.

Pai ake teenei!
This is better.

又、ake は連続して起こるのを表す。

i mua tata ake
shortly before

mea ake
presently

ao ake te raa
next day

英語の再帰代名詞は ake に用いられ、マオリ語の発音で訳されている。

tooku whare ake or tooku ake whare
my own house

ki a raaua ake
to themselves

ana tama ake
his own sons

Hoake は ho と ake が合致したもので、意味は to set out または go の意味である。

例えば、in hoake taatou ki te whare! は Let's go to the house. となる。iho は副詞 downwards の意味で、二つのものが別のところで一つになるとき、比喩的かつ現実に iho は高い位置で iho の状況や動きを限定する。Whakatuuria が獄中にいた時の会話に注目する。

'E koe e iri iho nei, koorero iho ra!' Ka mea iho taua maaia ra, 'Te kino hoki o ta koutou haka e rongo iho nei au!' Ka mea ake taua iwi nei, 'He iwi pai koutou ki te haka?'

'You hanging up there, speak!' That fellow said, 'What a terrible haka it is that I can hear.' Those people said, 'Are your people good at haka?'

又、Iho は after の意味で、muri と共に用いられる。I muri iho は soon afterwards の意味を成す。又、適切なコンテクストのなかで iho は形容詞の比較として使われている。

参考文献

Bruce Biggs Let's learn Maori A guide to the Study of the Maori Language 1969 Auckland univ.

Bell, A. Homes, J. New Zealand 1991 Auckland Longman

Benton, R. The history and development of the Maori language 1991 Wellington Government Printer

Ngata, H.W. English Maori Dictionary 1993 Auckland, Reed Books

Williams, H.W.A Dictionary of the Maori Language 1971 Wellington

Yosinari Sawada an itroduction to NEWZEALAND ENGLISH オセアニア出版